デュアル・シュール

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デュアル・シュール

【Ｎコード】
Ｎ４３７７Ｚ

【作者名】
西崎想

【あらすじ】
ニューヨークの裏通りで出会った、クラフトとジーン。
彼らは、世界崩壊の時が迫っていることを知っていた。
戦闘時と、普段とで、態度が急変してしまう、クラフト。
マフィアの娘のジーン。そんな二人が、世界を救う！？

プロローグ　―崩壊のカウントダウン―

西暦２０９１．ニューヨーク。
繁華街、裏通り。
ここは、浮浪者、酔っ払い、不良、など、気持ちの宜しくない、者たちがはびこっていた。
その、もう一つ下の、階段を降りたところにある、広場。
その一角に、ポツンと、テーブルに布をかけてあるだけの、簡単な店構えに、一人の男がいた。
彼は、どこか暗い表情の中に、一筋の光明が見える。
その男は、誰かを待っていた。
誰？
それは、その男本人にだってわからない。
男は、長い布……ローブを身にまとっていた。

きゃっきゃっ

何人かの、女の子たち、高校生が団体で通りかかった。

「ねえねえ」
その中の背の低い女の子が、ローブの男を指さして、
「あれ、占い師ー？」
「えー？なんかこわあ～い」
「流行ってないんじゃない？」
「いこいこ」

きゃっきゃっ

そう言いながら、女子高生たちは去って行った。
男が待っているのは、彼女たちではないようだ。

一今日も、またダメか？

そう、男は湿っぽく思っていた。

その時だった。

カッカッ……

ヒールの音を響かしながら、一人の女が歩いてきた。
その女は、この通りには、おおよそ似つかわしくない、綺麗な姿をしていた。

女は、男へ近づいて行く。
そして、前まで来ると、歩みを止めた。
「貴方、占い師？」
「……ええ」
男は、ぶっきらぼうに、それだけ言った。
「私のこと……占ってくださる？」
「……それが仕事ですから」

じっと、手相を見る、男。
一この人、変わってるな……。
そう思いながらも、

「恋愛運が良いですね」

ほとんどでたらめに、男はそう言った。

「まあ、ほんと？」
その割に、女は、良い反応をした。」
そして、
「その、水晶玉。使わないの？」
そう言った。
男は驚いて、女を見た。

「ねえ、どう？」
その女の角度からして、それは見えない角度にあったのだ。
一占ってみるか……。
そう思い、男は水晶玉を机に置いた。

……！？

「う……」

男は、そのイメージに眉をしかめた。

「ねえ、どう？」
「……」
男は一息ついて、
「世界は、崩壊に向かいます」
「へえ……？怖いわね」
「私は貴方を、待っていました」
「あら、ほんと？」
女は少し笑みを浮かべた。

「私と……一緒に……来てくださいます？」
「あら？ナンパ？」
男は下を向いた。

そして、商売道具をしまい出した。
「いかがです？」
その女は、男にそういわれると、

にやあ～と、笑い、
「いいわよ」
そう、言った。

クラフトとジーン

「俺はクラフト。君は？」
「私？う～ん」
何か躊躇している女。少し考えて、
「いいわ、私はジーン」
「ジーンか、よい名だ」
そうクラフトが言うと、
「本当？そんなこと言ってくれたの、貴男が初めてよ」
クラフトは、そういわれると、下を向いた。
「貴男、もう、その布、取っちゃいなさい」
ジーンは、そういうや否や、クラフトのローブに手をかけた。
ばさっ！
「……」
「あらあ、結構いい男じゃないの」
クラフトは、ローブの下の姿をあらわにされた。
服は、ヨレヨレのジーンズと、Ｔシャツ。髪は少し伸びていて、
黒い。１８０？くらいありそうな身長と顔つきは結構いい男だった。
「なんか、良い服でも来たら、もっといい男になりそうね」

そんなジーンは、ブロンドの髪とスレンダーな体をしていて、その体型をフルに生かした、ピチッとした服を着ていた。

「そうね、私が買ってあげる」

そういうと、ジーンは、クラフトの腕をつかんで、町へ繰り出した。

「ここなんて、どう？」

そう言って、ジーンが立ち止ったのは、ブランド品が並んでいる、見るからに高そうな店。

「入るわよ」

そういうと、ジーンは、店の中へ、

「いらっしゃいませ」

店内は明るく、店員は、丁寧に斜め４５度に身体を曲げてお辞儀をしていた。

「貴男のお好みは？」

「……俺は」

そういうと、クラフトは考え込んでしまった。

「あら、貴男優柔不断？いやあねえ」

ジーンはそんなクラフトを見ると、自分で、パパッと服を選んだ。

「どう？こんなのは」

「そうだな……」

「じゃあ、これは？」

「……もう少し、かっこいいのが」

ジーンははあーっと息を吐くと、
「ああんなた、優柔不断のくせに、選り好みするの？もおう」
「……いや、そういうわけじゃあ」
そう言われると、クラフトは口をつむんでしまった。

「あら？あ、ごめんなさい？」
「いや……君が選んだのでいいよ」
「そおう？」

じゃあ、ということで、ジーンが服を選んだ。
「こんなのは？……と、良いみたいね」
クラフトの表情を見て、ジーンがそう言うと、
「じゃあ、これ、カードで」
はい、と素早くカードを店員に渡した。

襲来

革の上下にブーツ、クラフトは、満更でもないようだ。
それを見て、ジーンはカードを出した。

外に出た二人。
ジーンは、駐車場に来たところで、止まった。
「さ、ここよ」
すると、クラフトは、ジーンに抱き着いた。

ドキッとするジーン。
「ク、クラフト？」

「君は、何を知っているんだ？」
「え？」
「なぜ、俺の所に来た！」
語気を荒げるクラフト。それを聞いたジーンは戸惑った。
「な……なに怒ってんのよ」
「君と会った時から、ずっとつけられている」
「え……！？」
辺りを見ようとするジーン。
「見るな！」
小さい声でしかし鋭く、クラフトは言った。

「君は、銃を持っているか？」
「え、ええ」
「走れ！」
その声に、ジーンは走った。

ダーン！

銃声が響く。

「きゃああ！」

そう叫びながらも、ジーンは自分の車にたどり着いた。

「よしっ！」

クラフトは、銃で応戦しながら、ジーンの所へ、

「ちょ、ちょっと！なあによおう！」

「君の事を歓迎しているんだろう！」

そう言って、クラフトは、ジーンに、

「車のキイだ、開けるんだ！」

「え、ええ！」

ピー

カチッ……

急いで入る二人。

「はやく！」

その車は、すごい速度で、走り出した。

カーチェイス

車は走り出した。

「どういうこと？……ねえ！」

ジーンはクラフトに聞く……というより、相手に聞きたいのだろう。

クラフトは、一回、ため息をつくと、

「俺には、解らない」

「もうっ！」

その時だった、

ガツン！

「きゃああ！」

車が大きく揺れた。

「あいつら……！」

車で、クラフトたちの車に体当たりをしてきたのだ。

「ちょっとお！なんなのよおう」

ジーンが叫ぶ。

「ジーン！車の運転をうまくしろよ！」

そう言うと、クラフトは窓を全開にした。

「な、なにすんの？」

「こう……するのさ！」

身を出来るだけ外に出して、拳銃を持つ。その拳銃が火を噴いた。

ガアン……！
ガアン……！

「きゃああ！」
車体が揺れた。

「しっかり、運転しろ！」
クラフトが叫ぶ。
「なによおう！もうっ！」
ジーンは今にも泣きだしそうに叫ぶ。

相手の車は、その間に、クラフトに銃で応戦。

ダダダダダッ……！

「クラフト！」
「大丈夫だ！しっかり運転しろ」

クラフトはそう言い、銃を構えた。

ガアーン、ガアーーン！

そのうち、道は、山へ。

「右にカーブしてくれ！」
「え、ええ！」

グウン……！

ジーンの反応が遅かった、のが、幸いした。
車がカーブするのが、遅いため、相手の車は対処しきれなかった。
その車はガードレールを突き破った。
そのまま、相手の車は崖の下へ。

「やりい！」
「ふう……良い車だ、なんていうんだ？」
「アストンマーティンよ」

水晶玉

街のカフェテラス。
そこに、クラフトとジーンはコーヒーを飲んでいた。
「ふう……ねえ、クラフト」
「……ん？」
何かを言いかけたジーンだったが……、
クラフトはシガレットケースを出した。

「あんた、タバコも吸うの！？もおう」
あきれた調子にジーンが言う。
「仕方ないだろう」
「もおう、アストンマーティンもクラッシュしちゃったしい」
「……ジーン、君はなんなんだ？」
「あ……あの、私ね？……マフィアの父がいて……」
クラフトは、それを聞いて、コーヒーを吹き出しそうになった。
「マ……マフィア……か」
「そ、そうなの、あのね、それでこんな」
「気楽な生活をしていた……か？」
「そ、そうそう、でも、私、知っちゃって……」
「世界滅亡を……か」
ジーンは身を乗り出した。
「私、好奇心旺盛で……ふふ」
「そうか……ふふ」
二人は、少し笑った。

「しかし、どこに世界滅亡なんて事態がくるんだ？」
クラフトは、周りを見回した。

「そうねえ……」
ジーンもそれにならう。
「まあ、知りたきゃ、……これが、ある」
そう言って、クラフトが、自分のスポーツバックから取り出したのは、水晶玉。
「それで……なんかわかるの？」
「ああ……」
そして、クラフトは水晶玉に手をかざして、目をつむった。
……
「なにが解るの……？」
そんなジーンの言葉も聞こえないほど、クラフトは集中していた。
サアアァァ……
……これは
水……？

水の音か……。

なんだ……？

ザーザー……、

滝……？

ここは……アメリカの……。

「ふう……」

そう言って、クラフトは瞑想を止めた。

「なんか、解った？」

「……ああ、しかし……少し……疲れ……」

ふうー……、

ともう一度深いため息をすると、クラフトは寝むってしまった。

ナイアガラの滝

「う……」
クラフトは、少し寝ていたようだ。
「クラフト、起きた？」
「あ……ああ」

のそお～っとしているクラフトに、
「あんたって、戦闘しているときと、普段と、まるっきり違う性格してるわね。ジキルとハイドみたい」
そういった。
「……俺は、そんな気はないが……」
そういって、頭をガシガシ掻いた。

「そう、思い出した。あんた、水晶玉で、何か見たんでしょう？」

「あ……ああ、忘れていた。すまん」
ジーンは身を乗り出した。
「それで？どうなったの？」

「ああ、たぶん……ナイアガラの滝に、何かがあるみたいだ」

「ナイアガラ……ふうん」
「それじゃあ、行くか？」

「待ってよ、私のアストンアーティン。ダメになったのよ」
クラフトは、少し考えて、

「電車……」

そう言いかけると、

「はい、ブー。私、市民の暮らし、ダメなの」

「……じゃあ、どうする？」

すると、ジーンが、キャッシュカードを見せた。

「はあい、これよおう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4377z/

デュアル・シュール

2011年12月24日05時50分発行